

目指すは自然に触れ合える憩いの場
かつての遊び場をよみがえらせた



おおぶ竹林循環プロジェクト BUNKAI

代表 箕浦 希奈さん(写真中央)



「神田小学校の裏にある放置竹林を整備し、資源を循環させる地域のコミュニティづくり」に挑戦しています。そう話すのは、おおぶ竹林循環プロジェクト「BUNKAI」の代表の箕浦希奈さん。昨年夏まで、ドイツでデザイナーとして過ごす中で、さまざまな社会課題に関心を抱き、「環境にとっても人にとっても、良いと思うことに力を注ぎたい」と思い立ち、欧米でプラスチックの代替として注目されていた竹に着目。日本では、放置竹林が社会問題となっていることもあり、「かつての遊び場で、今は放置竹林となっていた場所を整備しよう」と帰国を決意し、昨年にBUNKAIを立ち上げました。

「竹林整備に関して素人だった箕浦さんは、10年以上竹林整備を継続的に行っている三重県のNPO団体「桑竹会」に加入し、竹林整備のいろはを学びます。同時に竹林整備に必要な費用を賄うため、クラウドファンディングを立ち上げ、支援を募ります。「多くの方に支援していただいたことで、プロジェクトが私一人のものではなく、関わる皆さんのものになったと感じることができ、原動力となっています」と笑顔を見せます。

活動開始から半年。箕浦さんの思いに共感する人は多く、これまでに総勢100人を超える人が活動に参加。「主宰者が竹林整備素人だからこそ、世代や地域を越えて人が集まり、知恵を出し合い、学びながらプロジェクトを進めることができている」と活動を通して得た人とのつながりが、大きな財産だと話します。

竹林整備の魅力について「間引きした竹は、畑の土壌改良材として有用である。ポラス竹炭や調湿・消臭材など、素材として活用するだけでなく、竹を炭にすることで、土に還る過程で放出される二酸化炭素を固定することができるため、温暖化対策としても注目されています」と話す箕浦さん。今後について「放置竹林は手を止めると数年で元に戻るため、持続可能な仕組みづくりが必要であり、邪魔もの扱いされていた竹やぶを豊かな資源として地域循環させることが目標です。整備された竹林が、小さい頃に自分が体験したように地域の子どもの自然体験の場になればいいな」と目を輝かせます。さらに、最近ではデトックス効果などを期待して竹炭パウダーが注目されているそうで「竹炭を使ってお菓子や化粧品などを作っていけたら」と若い世代へ向けたアプローチも取り入れます。楽しんでみながらも、持続的な竹林整備に向けて「試行錯誤を続ける箕浦さんから、今後も目が離せません。」



▲切った竹林で橋を作るメンバーら

cover

今号の表紙は、スタンダードプードルとともに暮らす加古莉人さん・雛梨さんにご協力いただき、撮影しました。犬や猫などは大切な家族であり、人生をともに歩むパートナーです。巻頭特集もご覧いただき、犬と猫との共生社会について、一緒に考えてみませんか。

